

令和 7 年度病虫害発生予報第 6 号の発表について

このことについて、次のとおり発表したの送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	穂いもち 紋枯病 斑点米カメムシ類 トビイロウンカ	やや多 やや多 並 やや少
カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ミカンサビダニ アブラムシ類 アザミウマ類	やや少 やや少 やや多 やや多 並 並
モ モ	せん孔細菌病 ハダニ類 ナシヒメシンクイ	やや少 やや多 やや多
カ キ	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 やや多
ブ ド ウ	べと病	やや少
果樹の 共通害虫	カメムシ類 吸蛾類	並 多
露地 キュウリ	べと病 炭疽病 褐斑病 うどんこ病 斑点細菌病 モザイク病 ミナミキイロアザミウマ	やや少 やや少 やや少 やや少 少 やや少 並

作物名	病虫害名	予想発生量
露地 キュウリ	アブラムシ類 ハダニ類	やや多 やや少
青 ネ ギ	疫病 軟腐病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	やや少 やや少 やや少 やや多
アスパラガス	褐斑病 ネギアザミウマ アブラムシ類 ハダニ類	やや少 やや多 並 やや多
イ チ ゴ	炭疽病 うどんこ病 アブラムシ類 ハダニ類	多 並 並 やや多
露地キク	白さび病 アブラムシ類 ハダニ類 アザミウマ類	並 並 やや多 やや多
野菜、花き の共通害虫	ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ タバコガ類 (タバコガ 、 オオタバコガ)	並 やや多 やや多

太文字の病虫害：向こう 1 か月の間、発

生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+) ：発生量を多くする要因
- (-) ：発生量を少なくする要因
- (±) ：発生量が平年並になる要因

令和7年度 病虫害発生予報 第6号（9月）

A. 水稻の病虫害

1. 穂いもち

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での8月下旬の穂いもちの発生量はやや多かった。（＋）

(2) 8月上旬の普通期栽培での穂いもちの発生量はやや多かった。（＋）

(3) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

対 策 出穂後に天候不良が続く場合は、穂揃期の防除後にさらに追加防除も検討する。

2. 紋枯病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での8月下旬の紋枯病の発生量はやや多かった。（＋）

(2) 8月上旬の普通期栽培での発生量はやや少なかった。（－）

(3) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 出穂後も上位進展が続く場合は、液剤や粉剤で追加防除する。

3. 斑点米カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 8月上旬の早短期水稻の穂上でのすくい取り調査では発生量はやや少なく、大型カメムシについては少なかった。（－）

(2) 8月上旬の普通期栽培周辺の畦畔雑草のすくい取り調査では発生量は少なかった。（－）ただし、大型カメムシについては平年並であった。（±）

また、一部の地域で発生量がやや多かった。（＋）

(3) 県予察灯での7月第6半旬から8月第5半旬までの大型カメムシの誘殺数は平年並であった。（±）

(4) 防除員報告では、発生量の多い地区があった。（＋）

(5) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 穂揃期後の防除時期は、粒剤の場合は出穂7～10日後、液剤や粉剤の場合は出穂10～14日後である。また、ミナミアオカメムシが繁殖している場合は、粒剤よりも速効的で効果が高いとされる液剤や粉剤の使用が望ましい。

(2) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。

(3) 出穂後の除草は、斑点米カメムシ類の圃場への侵入を助長するので収穫2週間前までは控える。

4. トビイロウンカ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での発生量は平年並であった。（±）

(2) 8月上旬の早短期栽培及び普通期栽培での発生は認められなかった。（－）

(3) 県予察灯での誘殺は認められなかった。（－）

- (4) 9月の気象は気温が高い予報である。(+)
- 対 策 (1) 出穂期頃の必須防除を徹底する。薬剤散布の際は斑点米カメムシ類の防除を兼ねて行う。
- (2) 圃場における発生状況を確認し、25株調査して250頭(株当たり10頭)以上の発生を認めたら追加防除を行う。
- (3) 本虫の発生は、圃場間や同一圃場内でも偏りが大きいので、防除を行った場合でもその後の発生状況に十分注意し、防除効果を確認するとともに必要に応じて追加防除する。
- (4) 本虫は株元に生息しているので、薬剤散布は株元まで薬剤が届くよう、丁寧に行う。

B. 果樹の病害虫

ーカンキツー

1. 黒点病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 一般圃場での8月下旬の発生は認められなかった。(－)
(3) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 伝染源である枯枝を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 薬剤散布は、前回の散布から1か月以内または累積降水量250～300mmを目安に行う。

2. かいよう病

- 予 想 発生地域： 中晩生カンキツ栽培地
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 県予察圃場及び一般圃場での発生を助長するとされるミカンハモグリガの8月の発生量はやや少なかった。(－)
(3) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発病した梢葉、果実は早めに除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 樹勢を健全に保ち、ミカンハモグリガ防除と防風対策を徹底する。

3. ミカンハダニ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 秋ダニが果実に寄生すると品質に悪影響を及ぼすので、寄生を認めれば直ちに薬剤防除を行う。
(2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. ミカンサビダニ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は平年と同様に認められなかった。(±)

- (2) 一般圃場での8月下旬の発生量は多かった（＋）
- (3) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 発生が多い圃場では、9月中旬までに防除する。

5. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
(2) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 発生が多い圃場では、防除する。

6. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月中旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
(2) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 光反射シートを地表面に設置する。
(3) 近年ハナアザミウマの発生が多くなっており、発生が認められる場合は早めに薬剤防除を実施する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－モ モー

1. セン孔細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量は少なかった。（－）
(2) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(3) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 発病枝は伝染源・越冬源となるので、見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 9月下旬から10月中旬の薬剤防除を徹底する。多発生圃場では薬剤を2回散布する。
(3) 台風通過後など強い風雨の後に薬剤防除を実施するよう心がける。
(4) 風当たりの強い圃場では、防風ネット等の防風対策を実施する。

2. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
(2) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
(3) 防除員報告では発生がやや多い地区があった。（＋）
(4) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 発生が多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。
(2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

3. ナシヒメシンクイ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 県予察圃場のフェロモントラップにおける8月の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 一般圃場での8月下旬の発生量は多かった。(＋)

対 策 収穫後の防除を行っていない圃場では、薬剤防除を実施する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は認められなかった。(－)
(2) 一般圃場での8月下旬の発生は認められなかった。(－)
(3) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。特に前年多発生した圃場では注意する。
(2) 台風や長雨が予想される場合や常発圃場では、予防的に薬剤防除を行う。
(3) 授粉樹や老木など、剪定や粗皮削り等の管理作業を実施していない樹の周辺で発生が増加する場合があるので注意する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 防除員報告では発生がやや多い地区があった。(＋)
(3) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 発生の多い圃場では9月の防除を徹底する。
(2) 果実とヘタの隙間に生息しているので、薬剤散布は丁寧に行う。特に、スピードスプレーヤー（SS）による防除では、かけむらができないように走行経路を見直すなど注意する。

－ブドゥー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水に努める。
(2) 収穫後の薬剤防除を徹底する。
(3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

－果樹の共通害虫－

1. カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場予察灯の8月の誘殺数はやや少なかった。(－)
 (2) 綾歌郡綾川町の予察灯における8月の誘殺数はやや少なかった。(－)
 (3) カキの一般圃場での8月下旬の発生は認められなかった。(－)
 (4) 県内16地点のヒノキの球果結実量はやや多かった。(＋)
 (5) 県内8地点のヒノキ球果口針鞘数に基づく離脱予測では、果樹園への飛来は、9月中旬以降と予測されることから、今後増加が見込まれる。(＋)
- 対 策 (1) 有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。
 (2) カンキツ類は、着色前の果実でも吸汁されると果実内部が褐変し、落果するため注意する
 (3) 施設栽培の場合は、開放口をネット(4mm目合い)で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
 (4) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
 (5) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
 (6) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
 (7) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
 (8) 防除薬剤は、主要農作物病害虫雑草防除指針、香川県監修の果樹病害虫防除暦を参考にする。

2. 吸蛾類(アカエグリバ、ヒメエグリバ)

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 多

根 拠 県予察圃場予察灯の8月の誘殺数は多かった。(＋)

- 対 策 (1) 熟果及び裂果などを早めに取り除き、適正に処分する。
 (2) 被害の多い場合は、夜間の捕殺、網掛け、黄色蛍光灯などで対応する。

C. 野菜、花きの病害虫

－露地キュウリ－

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： やや少

- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
 (2) 耐病性品種を用いる。
 (3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
 (4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
 (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： やや少

- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

- (2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は認められなかった。(－)
- (2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 耐病性品種を用いる。
- (3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (4) 薬剤散布は予防的にを行い、初期感染を防ぐ。
- (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
- (2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 耐病性品種を用いる。
- (3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (4) 薬剤防除は予防的にを行い、初期感染を防ぐ。
- (5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 少
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
- (2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
- (2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、初発時期の葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 薬剤防除は予防的に行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜追加で防除する。

6. モザイク病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
- (2) 秋キュウリでの8月下旬のアブラムシ類の発生量はやや多かった。(＋)
- (3) 黄色水盤での8月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
- 対 策 (1) アブラムシ類の防除を行う。

- (2) 発病株は、早期に抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 収穫用具の消毒をする。

7. ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防除を行う。
(2) シルバーマルチを敷設する。
(3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(5) 施設栽培からの飛び出しを防ぐため、発生を確認した施設では、栽培終了後、施設を密閉して死滅させる。
(6) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(7) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

8. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 黄色水盤での8月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
(3) 今後も有翅虫の飛来が続く場合があるので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

9. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－青ネギー

1. 疫病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(2) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているので、圃場をかえるか土壌

消毒を実施する。

- (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

2. 軟腐病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 窒素肥料の過不足がないよう肥培管理する。
(2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(3) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
(4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

3. ネギハモグリバエ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生は認められなかった。(－)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適切に処分する。
(3) 多発してからの防除は困難であるため、発生の兆しが見られたら早めに防除する。
(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

4. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は多かった。(＋)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－アスパラガス－

1. 褐斑病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。
(2) 刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。

2. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設したりするなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない

3. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 黄色水盤での8月のアブラムシ類の誘殺数はやや少なかった。(－)
 (3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
 (4) 今後も有翅虫の飛来が続く場合があるので、病害虫防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

4. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
 (2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーイチゴー

1. 炭疽病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **多**
- 根 拠 (1) 育苗床での8月下旬の発生量は多かった。(＋)
 (2) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発病葉やランナーは可能な限り除去するとともに除去した発病葉、ランナーは伝染源となるので適正に処分する。
 (2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返りがないように注意する。
 (3) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗中に伝染環を断つ。
 (4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
 (5) MBC殺菌剤 (FRACコード：1)、N-フェニルカーバメート類 (同：10)、QoI殺菌剤 (同：11)、PP殺菌剤 (同：12) に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 育苗床での8月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 8月の気象は気温が高く推移した。(－)

- 対 策 (1) ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗床で発病を減らすよう努める。
(2) 発生圃場では、7日より短い間隔で薬剤防除を行う。
(3) 収穫を終了した圃場（本圃）の株は直ちに処分するとともに、子苗（ランナー）を切り離した後、親株は早期に除去し処分する。
(4) 窒素肥料の過多や葉が混み合ったりすると多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
(5) 耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での8月のアブラムシ類の誘殺数は、やや少なかった。(－)
(3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 育苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
(4) 今後也有翅虫の飛来が続く場合があるので、病虫害防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
(3) 育苗床（苗の親株からの切除後）では発生をこまめに観察し、早めに防除を実施する。散布にあたっては、使用回数に留意する。

ー露地キクー

1. 白さび病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 8月下旬の発生は小ギクでは発生を認められず、輪ギクでは平年と同様に認められなかった。(±)

- (2) 9月の気象は降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) 採穂前の防除を徹底し、本圃に病気を持ち込まないようにする。

- (4) 窒素質肥料の過不足がないように肥培管理をする。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は小ギクではやや多く（＋）、輪ギクでは平年並であった（±）。

(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での8月のアブラムシ類の誘殺数は、やや少なかった。（－）

(3) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 今後作付けを行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(5) 今後も有翅虫の飛来が続く場合もあるので、病害虫防除所ホームページに掲載している黄色水盤トラップによる誘殺数を参考にして適期防除に努める。

3. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は小ギクではやや多く（＋）、輪ギクでは平年並であった（±）。

(2) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は小ギクでは平年並（±）、輪ギクでは多かった（＋）。

(2) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) アザミウマの吸汁により、ウイルス病が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。

(2) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。

(3) シルバーマルチ等を被覆することで飛び込み量を減らすことができる。

(4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(5) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. ハスモンヨトウ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は秋キュウリでは認められず（－）、イチゴ育苗床では

平年並であった（±）。

- (2) フェロモントラップでの8月の誘殺数はやや少なかった。（－）
- (3) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の予報である。
- 対 策 (1) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、本圃の果菜類等ではこれらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。
- (2) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
- (3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. シロイチモジヨトウ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 8月下旬の青ネギでの発生量はやや多かった。（＋）
- (2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの8月誘殺数はやや多かった。（＋）
- (3) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (2) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
- (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. タバコガ類（タバコガ、オオタバコガ）

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**（令和7年5月19日付け病虫害発生予察注意報第1号発表）
- 根 拠 (1) 8月下旬の秋キュウリでの発生量はやや少なかった。（－）
- (2) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数は多かった。（＋）
- (3) 綾歌郡綾川町のタバコガ類のフェロモントラップでの誘殺数はやや多かった。（＋）
- (4) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の予報である。
- 対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 花蕾や生長点を食害するので、被害が見られたら直ちに薬剤防除を行う。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>



近隣農地の作物等や住宅地等での
農薬飛散防止の注意が必要です。
風の状況を確認し、飛散の恐れがあ
るときは散布作業を中止しましょう